

登龍門通信

博士課程教育リーディングプログラム（オールラウンド型）

No. 6 / December 10th, 2016

「創造」と「探求」の練磨 North Carolina Ambition Camp 2016

2016年6月5日(日)から6月25日(土)までの3週間にわたり、アメリカ合衆国ノースカロライナ州North Carolina State University (NCSU) において、North Carolina Ambition Camp (NCキャンプ) 2016が開講されました。今回のNCキャンプには、第1期生5名、2期生9名の合わせて14名の履修生が参加しました。

本研修は、ノースカロライナ州リサーチ・トライアングル・パークに設置された名古屋大学の国際産学連携拠点 (NU Tech) およびNCSU国際プログラム担当部門Global Training Initiative (GTI) の支援のもと、NCSUのEntrepreneurship Initiative (EI) The Garageにおいて、起業家精神の修学を通し、問題提起と解決プロセスを体感するプログラムです。講師には、これまでに3700名以上の学生たちに起業家精神について講義してきた経験を持つJennifer Capps氏を迎え、全6回の講義を中心とした実践的なトレーニングを実施していただきました。履修生は、自分たちの身の回りから問題を抽出し、その問題の本質に迫り、問題を解決するために新たなものを生み出すプロセスを体験しました。

トレーニングと並行して、起業家精神の講義に加え、起業家が集まるスペースを提供するAmerican Underground視察や、いくつかのベンチャー起業を訪問する機会がありました。さらには、名古屋大学の卒業生であり、実際にWHILL, Inc.を起業し、アメリカで活躍する榊原直人氏の講義を受ける機会に恵まれました。榊原氏からは、ご自身の経験談をもとに、イノベーションが生まれるプロセスを丁寧に講演していただき、多くの履修生が感銘を受けた様子で、1時間以上におよぶ質問が続きました。



PROFESSIONAL
Gateway to Success in Frontier Asia



最終日には、自分たちで考えた解決策を具現化したMinimum Viable Product (MVP) をピッチ形式（投資家に向かって話すような短いプレゼンテーション）で発表し、3週間にわたる研修の集大成を披露しました。今年度の傾向としては、設定した問題に対する解決方法として、インターネットサービスやアプリケーションの提案を行う履修生が多く見られました。一方で、具体的な試作品を作成した履修生や、問題を解決するための装置を提案したユニークな発表もありました。また、中間発表においてGTIスタッフ、教員、他の履修生から得られた多くのフィードバックをもとに、どの履修生の発表もより磨きのかかったものになっていました。

最後の週末2日間には、ワシントンD.C.を訪問し、スティムソン・センター主任研究員の辰巳由紀氏からシンクタンクの役割などを解説していただきました。翌日にはアメリカ国立科学財団（National Science Foundation, NSF）のRebecca Keiser氏とAnne Emig氏から、アメリカにおけるNSFの役割および研究費の審査プロセスを具体的にご説明いただき、将来アメリカで研究活動を行うことを考えている履修生にとっては、貴重な情報を提供していただきました。履修生は、ノースカロライナ州滞在中とは異なった側面から同国を体感できたのではないのでしょうか。

本研修は、将来起業を目指す履修生にはもちろんのこと、登龍門が養成を進める、博士号を持ちながら様々な分野において実践的に活躍する「PhD プロフェッショナル」の育成に非常に有意義であったと感じています。なぜなら、周辺に存在する問題を掘り下げ、それが「私」だけではなく「私たち」の問題であり、解決すべき問題であるストーリーを組み立てていく能力、そして問題を解決に導く能力というのは、起業

活動のみならず、研究や社会活動においてモノを創造する際には基礎となる素質であると捉えることができるからです。本登龍門プログラムの折り返し地点を迎えた履修生には、NCキャンプから得たこの思考様式および能力を今後のキャリアパスに生かしてほしいと願っています。

（田畑 亮、田中瑛津子）



経済学研究科 佐藤嘉晃



理学研究科 曹原

コンビニ風店舗でトップリーダートーク

2016年7月16日（土）に、18名の履修生が大垣共立銀行（OKB）のドライブスルー店舗とコンビニ風店舗を見学し、行程の最後に土屋 嶮頭取のトップリーダートークを受講しました。

長久手市のドライブスルーながくて出張所（ポポット）では、榊原芳雄支店長と羽賀博之次長から、長久手市は平均年齢が37.7才の若い町で、市民生活が車に大きく依存していることがドライブスルー店舗開設の背景にあること、新しい店舗の開設にあたって行員が大手外食産業のドライブスルー店舗で3ヶ月間の研修を受けて、そのノウハウをポポットに最大限生かしているという説明を受けました。なお、店舗の一角には電気自動車用のEV充電スタンドも併設されていて、OKBの将来展望の一端を知ることができました。

半田市のコンビニ風店舗（コンビニプラザ半田）では、馬淵建至支店長と西尾賢哉次長から店舗の特徴に関する説明を受けながら、無料喫茶コーナーや雑誌コーナーのある店舗を見学し、気軽に入ることができる雰囲気を味わいました。半田高校に近いこの場所に店舗をオープンしたのは、将来の顧客確保のねらいがあることもよくわかりました。

見学後、根本二郎・経済学研究科教授の司会で、店舗2階のセミナールームでトップリーダートークが行われました。土屋頭取はOKBの歴史を振り返りながら、他の銀行に先駆けてOKBが行っている、災害時にとくに有効な「手のひら認証ATM・ピピット」や「レスキュー号」、遊び心満載の「ATMゲームサービス」、岐阜県山村向けの銀行機能を搭載した移動店舗「スーパーひだ1号」などについて分かりやすく解説しました。さらに銀行の商品開発には行員のアイデアを最大限取り入れているという説明があり、行員のアイデアか

ら生まれた商品の例として、シングルマザー応援など女性専用ローンと事業整理（自主廃業）を予定する法人向けのローン（愛称：カーテンコール）が紹介されました。土屋頭取は、将来、『銀行として、これ以上どんなサービスがありますか？』というコマercialを流してみたいというアイデア銀行マンならではの発言もありました。

トップリーダートークに参加した履修生からは、「銀行はサービス業と割り切るOKBのスタンスは素晴らしい」、「異分野のノウハウを貪欲に学ぶ姿勢は勉強になった」、「自分の実家は田舎でコンビニもないので、過疎化が進む高齢化地域では、移動店舗はもっと需要があるのではないか」、「金勘定だけではないOKBみたいな銀行を母国に作ってみたい」、「日本はセキュリティがいいので銀行強盗はあまりないが、移動店舗は自分の国では少し心配」、「OKBの存在はテレビコマーシャルで知っていたが、今日の土屋頭取のお話で、銀行の雰囲気がよく分かった」など多くの感想が聞かれました。

（足立 守）



大垣共立銀行 土屋 嶮頭取



根本二郎・経済学研究科教授



インドネシア夏研修 ～環境と調和した開発を目指して～

第3期履修生3名を対象に、インドネシア研修を2016年7月30日（土）から8月10日（水）で行いました。同国がASEANの要であることを体得し、持続可能な開発像を求める研修です。

8月1日（月）、ジャカルタ中心部のASEAN日本政府代表部大使公邸を訪問しました。須永和男大使からASEANの現状と日本との関係について説明していただきました。履修生から加盟国ごとの格差について質問があり、須永大使からEUとASEANの比較で説明していただきました。EUでは域内で支援して格差是正を行っています、ASEANでは外からの援助や投資に頼っているそうです。ASEANにおける意志決定は協議とコンセンサスにもとづいていることや、加盟国の内政不干渉の原則があるのも特徴です。

昼食後、ASEAN代表部から車で約1時間、トヨタインドネシア（PT. TOYOTA Motor Manufacturing Indonesia）に到着です。トヨタがインドネシアで大きな信頼を得るまでのお話がありました。最近の話題として、良質のバイオ燃料生産を行い環境に貢献するプロジェクトの紹介がありました。バイオテクノロジー先端技術を利用しています。若手職員と履修生との意見交換の場を設けていただきました。進路選択や海外勤務に関する履修生の質問に、職員の方から各人各様に経験にもとづいて話をしていただきました。

8月2日（火）はバンドンに移動し、地球工学研究所を視察しました。8月3日（水）はバンドンからジョグジャカルタへ鉄道で移動しました。

8月4日（木）、ジョグジャカルタでガジャマダ大学（Universitas Gadjah Mada）の学生が加わりました。砂防研究所にて施設を見学し、防災への意識を高めました。8月5日（金）、ジョグジャカルタ特別州政



府で、4部局から特別州政府の取り組みを紹介していただきました。8月6日（土）は午前世界遺産のボロブドール遺跡視察、午後ムラピ山中腹で火山災害跡地を見学しました。

8月7日（日）、履修生は研修のとりまとめです。8月8日（月）の午後は、履修生成果発表会です。特別州政府を意識して、「ジョグジャカルタのバスシステム」に議論が展開されました。発表会場に来られた観光局配属のJICAジュニア専門家が提案を局で紹介してみるということでした。小休止のあと、ガジャマダ大学浜元聡子先生の特別講演です。ガジャマダ大学での学部横断の実践教育プログラムの紹介でした。

8月9日（火）、プランバナン遺跡を視察後、ジョグジャカルタ空港へ。国内線でジャカルタまで移動し、そこから国際線で帰国の途につきました。

（高橋裕平）



須永大使と履修生の懇談



トヨタ若手職員と履修生の懇談



キルギス夏研修 ～キルギスでのビジネスプランを作成～

2016年夏のキルギス研修は8月4日（木）から13日（土）までの10日間、登龍門第3期履修生6名が参加して行われました。キルギスでの夏の研修は2014年の第1期履修生に続いて2回目となります。今回は研修テーマを「キルギスでの起業」とし、キルギス人学生も交えて2グループに分かれた学生たちが、自分たちがキルギスで起業するとしたらどのような事業を行うか、キルギスでのビジネス環境や実際の起業例を学んだうえで、使い得るリソースをフルに活用した「新しいビジネスプラン」を作成してもらいました。

第3期生は、2015年秋の初年次研修でモンゴルの将来の発展について、翌年春の研修ではラオス組とモンゴル組に分かれ、ラオス組はラオスの経済発展、モンゴル組は環境とその対策について、考えてきました。これまでの研修では履修生が課題に対する対策としての「提言」をとりまとめたのに対して、3回目の海外研修となる今回は、より具体的で実現可能性の高い「ビジネスプラン」を研修における成果品としました。

現地では、キルギスの経済、ビジネス環境、海外直接投資や起業に関する講義を受け、キルギスで事業を営む何人かの企業家ならびにJICAの一村一品プロジェクトのサイトや工房を訪問して関係者の話をうか



が、さらには、学生だけで街に出てキルギスの人の意見をうかがうフィールドサーベイを行う、等々、限られた時間で多種多様な活動を行い、最終日のビジネスプランの発表会を迎えました。

発表では、グループ1がボトル入り健康ミルクティーの製造販売会社を、グループ2は現地の人を対象とした文化体験型旅行を提供する旅行会社の起業を提案しました。2日前の中間発表の際に指摘された課題を彼らなりに考え、答えを見出そうとしている様子が見られ、好感の持てるプレゼンテーションでした。プレゼンテーション後の質疑応答では、わざわざこのために参加していただいた、滞在中にお会いしたキルギスの企業家の皆さまから、的を突いた質問やコメントが大量に出され、それに対して学生は自分たちで検討したことをもとに真摯に応答し、充実した発表会となりました。

移動日を除けば正味8日間の滞在で盛りだくさんの研修を行い、履修生・スタッフともに疲れがでたことも否めない事実ですが、それ以上に充実した研修ができました。これは、研修実施を支えてくれたキルギス日本センターのスタッフ、それにキルギスの実業家の方たち、関係者、キルギス人学生、アシスタントのおかげであり、本当に感謝しています。

（勝田幸秀）



イギリス夏研修

イギリス研修が2016年8月28日（日）から9月9日（金）の行程で実施され、第3期履修生10名が参加しました。

前半の5日間はエディンバラに滞在し、エディンバラ大学（The University of Edinburgh）とスコティッシュストーリーテリングセンターにおいて、現地の学生とともにパブリックエンゲージメントについて学びました。パブリックエンゲージメントでは、研究活動や成果について一般の人との対話を促進するため、自分の研究をストーリーやアナロジーなどを用いて紹介します。ワークショップを通して、プレゼンテーションのための多くのスキルを獲得するとともに、自分の研究を見つめ直し、新たな価値を見出すことができました。エディンバラでの研修の締めくくりとして発表会を行い、それぞれ5分のプレゼンテーションとフィードバックを行いました。5分という短い時間で自分の研究内容を分かりやすく、かつ魅力的に伝えるのはとても難しいことですが、それぞれ学んだことを生かして新しい発表スタイルに積極的に挑戦している様子が見られました。在エディ

ンバラ日本国総領事館より松永大介総領事も駆けつけてくださり、貴重なコメントをいただきました。限られた時間ではありましたが、空き時間には歴史が色濃く残る美しいエディンバラの街の散策も楽しむことができました。

後半の6日間はロンドンやケンブリッジ、エクセターなどに各自が赴き、自主研修を行いました。履修生自身が研修計画を立て、渡英の3ヶ月以上前から訪問したい機関や研究者にアポイントをとるなどして準備を行いました。帰国後、成果報告会が行われました。学会への参加、研究室訪問、街中でのインタビュー調査など活動の内容は多岐にわたり、自主研修の準備は困難の連続であったこと、その困難を乗り越えたことで自信がついたこと、研究や研究・高度な専門性を活用する能力（スポーク能力）の向上にも大きな成果が得られたことなどが報告されました。また、発表の仕方自体にも工夫が見られ、エディンバラでのワークショップの効果が表れていました。

（田中瑛津子）

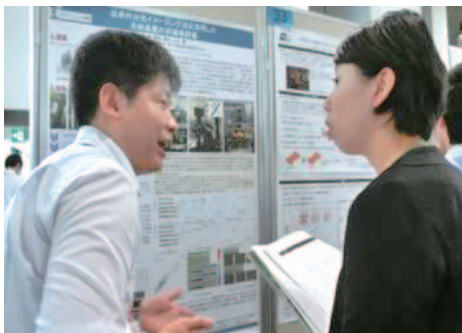


研修参加者にコメントをされる松永総領事

企業と博士人材の 交流会

8月27日（土）、豊田講堂・ホワイエにおいて、博士人材に関心の高い企業の人事担当者・研究開発担当者をお招きし、ビジネス人材育成センター主催による第6回企業と博士人材の交流会が開催されました。午前にはポスターセッション、午後には交流セッションが行われました。ポスターセッションの目的は、研究内容・成果を同分野・異分野を取り混ぜた企業担当者に分かりやすく説明し、自身のプレゼンテーションスキルを見直す機会とする、企業担当者の研究内容に対する興味・視点を知る、今後のキャリアパスに生かす機会とすることでした。PhDプロフェッショナル登龍門からは、第1期履修生の藤井亮輔さん（医学系研究科）、馬 特さん（生命農学研究科）、第2期履修生の中本謙太さん（工学研究科）、江崎寛季さん（医学系研究科）の4名が参加し、それぞれが熱心に説明している光景が見られました。登龍門では、非専門家に自身の研究内容を分かりやすく説明することに焦点をあてた教育も実施しており、ポスターセッションはまさにその学びを实践する場としてよい機会になったと思います。交流セッションでは、約50企業からの2分間プレゼンテーションや学生による企業ブース訪問が行われ、それぞれが興味のあるブースへ赴き、企業担当者と双方向で話す機会に恵まれました。

（野口道代）



生命農学研究科 馬 特

ヤングメンター制度

PhDプロフェッショナル登龍門では、博士前期課程の履修生を対象にヤングメンター制度を実施しています。履修生とは異なる専門分野の若手教員をヤングメンターとして、異分野研究への理解を促しています。これは登龍門履修生が、高い専門性に加え、「PhDプロフェッショナル」として必要な専門性を活用するスポーク能力、その中でも特に「異分野理解力」の獲得を目指すものです。今年度は2016年10月より開始し、2017年9月までの1年間で多種多様な講義や実験が行われる予定です。名古屋大学高等研究院に所属するYoung Leaders Cultivation（YLC）教員を中心に、法学、文化人類学、考古学、数学、天文学、医学、工学、生物学、農学など多岐に渡る17コースが設けられています。履修生34名（第3期生19名、4期生15名）は、YLC教員とのマッチングを経て、各コース2名ずつ配属されました。異なる分野の理解を促すため、例えば、日本語文化について専攻している履修生が、電波天文学を学ぶというような配属先振り分けになっています。履修生には、YLC教員が行っている最先端の研究を体験し、そして学び、幅広い知識や思考能力を獲得してくれることを期待しています。

（田畑 亮）



ヤングメンター実施風景
法学研究科のAlisher特任助教の指導のもと、「Participating at IIA Mapping Project of UNCTAD」のテーマについて学ぶ坂田有実（生命農学研究科）と劉 迪超（情報科学研究科）



名古屋大学
NAGOYA UNIVERSITY

Message from Students

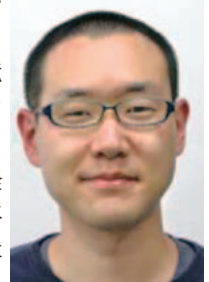
● 異分野・異文化を理解することで、世界が変わる



文学研究科 哲学専攻（第3期履修生）／曾イ
カントには、自由は認識活動ではなく、実践活動の中にあるという主張があります。私は PhD プロフェッショナル登龍門に参加してからこの1年間、自分が苦手なことに挑戦したり、興味がなかった問題を真剣に考えたり、様々な分野の専門家と交流したりすることを通じ、今まで自分が持っていた価値観や考え方はごく限られたな知識と経験だけにとづいていたのではないかと感じ、それを考え直すことができるようになった気がします。私は人文学を学ぶ学生として、物理や数学は自分の分野とはかなり距離があると思っていましたが、物理専門のヤングメンターと一緒に勉強することを通じ、異なる分野の間には、本質として「相違点」より「共通点」があるのではないかと感じるようになりました。ボブ・ディラン氏のノーベル文学賞受賞により、「文学」という概念は広がっていくのではないかと思います。これからの世界は、問題解決のため、分野の枠を超えた多数の分野の協力がますます重要ではないかと考えます。さらに、海外研修で参加したパブリックエンゲージメントというワークショップを通じ、「他人の研究を理解することや自分の研究を他人に理解してもらい、関心をもってもらう」ための努力と能力こそ、将来のリーダーにとって不可欠ではないだろうか考えるようになりました。これから、私も登龍門の活動から身につけた異分野と異文化理解を自分の研究に活用し、自分の分野「哲学」の概念をより広くするよう努力していきたいと思えます。

● 博士号の先へ

理学研究科 素粒子宇宙物理学専攻（第3期履修生）／遠藤隆夫
博士号を取得後、社会に出て活躍できる人材になりたいという思いから、PhD プロフェッショナル登龍門に応募しました。本プログラムには、研究科、国籍といった生まれ育った環境まで全く異なる人々が集まっています。そのような環境の中で、これまでおよそ1年の間に3回の海外研修、数々のトップリーダートーク、その他日本文化体験や異文化の講義を経験してきました。こうした活動は、私に新しい価値観や物事の捉え方をもたらしてくれました。その一方で、これらの体験は自分自身の持つ価値観や考え方の認識にもつながり、自己を省みる上で非常に有益なものとなっています。



これからの社会では、新しいものを作り出すということはもちろんのこと、すでにあるもの同士を、日々進歩する技術を応用して結びつけ、そこから新しいものを生み出す創造性も重要になると考えています。複数のものを結びつけるためには、それぞれの事柄に関する知識や技能を深めるだけではなく、その事柄を周辺にある物事を含めて俯瞰的に見る必要があると考えています。PhD プロフェッショナル登龍門では、分野横断的な講義や研修が数多く用意されています。本プログラムを通し、物事を多角的に捉えるだけではなく、複合する見方を養いたいと考えています。

登龍門通信

2016年12月10日／第6号

編集・発行：名古屋大学 PhD 登龍門推進室
東山キャンパス 理学部 C 館3F 319号室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL : 052-789-5717
E-mail : 10ryumon01@adm.nagoya-u.ac.jp
<http://www.phdpro.leading.nagoya-u.ac.jp>